

## ギリシャのマルクス

フランスの経済学者ピケティの「21世紀の資本」の翻訳本が売れているようだが、マルクスの「資本論」を意識した本が1年前の米国に続いて売れることになるとは地下のマルクスはもちろん、ほぼ絶滅危惧種の世界のマルクス経済学者にとっても驚きだろう。

驚きはもう一つあった。ギリシャの新政権の最重要ポストの財務大臣にマルクス主義者が任命された。といっても自称で、ピケティと同様マルクス経済学者ではない。ゲーム理論などを専門とする経済学者で、シドニーやテキサスの大学で教えていた。

彼がギリシャの債務削減や緊縮財政の見直しを求める交渉をIMF、ECB、ECのトロイカとやることになる。

新政権は既得権益に浸るオリガルヒの取り締まりも約束しており、選挙結果を受けて預金流出が顕著になり、銀行株が大幅に下げている。デフォルトを想定して国債のイールドも上昇した。

だが今のところ、ユーロ危機が深化してギリシャのユーロ離脱の可能性が焦点になった3年ほど前のレベルに比べればイールドの水準は低い。

それに何よりも国債がまとまって売られているのはギリシャだけだ。周辺国への波及が見られない。

これにはECBの量的緩和政策の決定が影響している。3月から毎月600億ユーロの国債を購入するからだ。

ただ今後の新政権とトロイカの交渉次第でギリシャのユーロ離脱が現実味を帯びてくれば話は別になる。欧州全域にある分離独立の政治的な潮流が強まり、ギリシャ一国に閉じ込められていた危機が周辺国に波及することが考えられる。

地政学リスクが一举に高まり、市場の様相も一変する。円も当然巻き込まれる。

その点ではギリシャのマルクスの動向には目を離せない。